



平成29年度
会報第1号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒892-0836

鹿児島市錦江町2-16

鹿児島県公立小・中学校

教頭会会館県教頭会事務局

TEL 099-226-8268

FAX 099-822-5580

会長就任のあいさつ



鹿児島市立清水中学校
教頭 川池 省三

去る五月十日に開催されました県公立小・中学校教頭会委員会において承認をいただき、会長に就任いたしました。

本年度の県教頭会会員数は七十一名、うち新任の教頭先生方は十一・二名です。近年会員数は減少傾向ですが、昨年度の約二倍の新任の教頭先生方が任用されましたことを大変喜ばしく思います。と同時に、その先生方を県教頭会が中心となって引っ張っていかねばならないことの重責を感じています。微力ではありますが、精一杯取り組んでいきたいと思っています。皆様方のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

今年四月二十八日に、文科省から平成二八年度の「教員勤務実態調査」の結果が発表されました。それによると、小学校の教員の約三

校現場への負担増に拍車がかかるのは明らかです。

その一方で、子どもたちを取り巻く環境は、スマートフォンなどの情報端末機器等の急速な発展と普及によるトラブルや、家庭の貧困等多くの課題が山積しています。子どもたち一人一人が等しく教育を受けられる環境をつくっていくよう努力していかねばならないと強く思っています。

このように社会情勢は非常に厳しい中ですが、私たち教頭は、時代の要請や国の動向を把握しながら、意識改革を図っていくことも必要です。また、学校現場では長時間勤務を解消するために業務改善を進めて、学校運営に携わっていくことが大切だと考えています。

さて、本県の教頭会の運営体制や研究大会への取組とその成果については、これまで先輩方が地道に積み上げてこられたものに新しい視点を加え、それを検証し、毎年実践をしてみました。鹿児島県教頭会の取組に対しては、他県からも高い評価をいただき、研究大会の運営等の参考にもなっていました。この研究大会を通して実践してきたことが、それぞれの学校や地域、児童生徒に還元され、本県教育に寄与しているものと確信しています。

今年度の研究は、全国公立学校教頭会第十一期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」の初年度になります。

十期までの主題に「未来を拓く」という文言が加わり、全公教が目指す学校教育が明確にされ、その実現のために、県教頭会でもより具体的な実践に努めていかなければならないと考えています。研究を進めるに当たっては、教頭会の研究の特色である「内省的思考による研究」及び3C(継続性・協働性・関与性)に焦点を当てた実践的研究を行う必要があります。

私たち教頭は、「職能研修団体」としての職務の専門性を高め、幅広く教育課題に対応する力を要求されています。今年度はさらに、県内八地区の会員相互の連携を深め、新たな教育課題解決のために精一杯取り組んでいきたいと決意を新たにしています。

そこで、今年度も次のようなことに重点を置いて教頭会の活動を進めていきます。

第一に、昨年度第五十回を迎えた県教頭会の研究成果を今年度の大会に生かし、これまで以上に地区の組織や研究体制を取り組みやすいように整えていきたいと考えています。新任の教頭先生方一二名を加え、日々の職務を遂行しながら研究大会へ向けての準備を、それぞれの地区の中で連携をとって進めていくことが大切だと思っております。

第二に、今年度リニューアルされた県教頭会のホームページを充実させ、全国大会や九州大会、各種研究会における有益な情報を発信し、会員への最新の教育界の動向を提供していくことで、教頭同

士の更なる連携の促進に繋がっていくように努めます。

第三に、県教頭会の最大の課題である教頭の処遇改善に向けた調査活動に努めるとともに、県教育委員会や県連合校長協会、全国公立学校教頭会等の各種団体との連携を強化し、要請活動を続けていきます。

第四に、昨年度の研究大会の反省をもとに、今年度の研究大会を継続した取組として運営していくことです。今年度は、九州大会が宮崎市で開催されます。六月の総会で、鹿児島、沖縄大会の流れを大切に、「九州は一つ」を合言葉に、全九州の教頭会でこの研究大会をより充実した大会になるよう盛り上げていくことを確認しました。

最後になりましたが、様々な教育界の難局を乗り越えていくためには、教頭先生方のこれまでの経験と建設的な意見が必要です。県教頭会は、今後も広く会員の皆様の声を聞かせていただき、それを生かしながら相互の連携を深め、充実した活動を進めていきます。平成二九年度の各学校における教育活動と、本県教頭会の活動が充実し、着実に前進することを祈念し就任の挨拶といたします。



随想

「家族との触れあいを」

枕崎市立桜山中学校
田邊 眞理子

生徒が庭を掃く。そこに箒の目がきれいに残される。

庭の伸びた草を抜く生徒の姿が目に入る。どれ程の生徒がこれらの行為を日常的に自分の家で行っているのだろうかと思う。ふと、ちいさかった頃の父との行為を思い出す。

今でも各地域では、清掃活動の日を設定し、早朝に一斉に実施される。かつて、私の地域では「清潔の日」として

年二回、家庭単位で自宅周辺の清掃をするものであった。その時、父は「道つくり」と称して家の前の道の清掃をすることが常となっていた。家の前の狭い道は、今のような舗装道路ではなく土の道で両端には草が生え、道の中央に向かって伸びていくものであった。その草をスコップの先で切るようにして揃えていくのであった。単純作業であつたが、一直線にきれいに揃えられていくことが、とても心地よく、一緒にすること

も楽しかった。

また、家の小さな庭に様々な樹木が植えられ四季折り折りの変化を感じ取ることができた。その庭の草を抜くことも楽しいことであつた。

日々の生活の中で、目にいたり耳に入ったりするものは、毎日の生活経験の積み重ねからの興味が基になる。

日常的な些細な行為を、子ども達は家族とどれだけ共有できているのだろうか。目の前にいる子ども達の一日の、一週間の生活は思いのほか忙しい。けれども生徒一人一人に家族との触れあいがあるに違いない。子ども達は今を生きている。後に振り返ったりふと思ひ出したりすることがあると思われるが、その時に家族との行為があふれ出てくるよ。

私の勧める一冊の本

ディズニーマの絆力

著者 鎌田 洋
発行所 アスコム
薩摩川内市立大東小学校
野間 義信

老若男女、人は何度もディズニーマランドに行きたがります。

ディズニーマランドでは客を「ゲスト」、そこで働く従業員を「キャスト」と呼びます。また、ランド内でゲストが楽しむ場所を「オンステージ」キャストが様々な準備を行う場所を「バックステージ」と呼ぶのだそうです。

なぜこうした呼称が生まれたのでしょうか。そこには、創始者であるウォルト・ディズニーマの想いが込められているからだそうです。

訪れた人々を幸福にする「夢と魔法の王国」であるディズニーマランドは単なる遊園地ではなく、訪れた人にそれを提供するための「ステーション」

ジ」であるという考えなのです。

つまり、そこで働く全ての人はキャスト（役者）でありサービスの仕方、施設の在り方など、「ゲスト」の幸福につながる役割を演じます。

ここで、使われている言葉を「ゲスト」が「子ども」、キャストを「学校職員」と置き換えてみると、学校現場にもピタリと当てはまるような気がします。

また、ゲストが安心して楽しめるための4つのキーワードをもとにした行動指針があるのだそうです。

- 1 Safety (安全)
 - 2 Courtesy (礼儀正しさ)
 - 3 Show (ショー)
 - 4 Efficiency (効率)
- キャストはこのSCSMに沿って行動し、ゲストが幸福になる環境を提供していくのだそうです。学校では、
- 一 子どもの安全
 - 二 心の込もった応対
 - 三 授業の充実
 - 四 教育課程の改善

といった感じでしょうか。

学校もディズニーマランドのようにゲストもキャストも「何度も来たい」「働きたい」と思える場所でありたいと思います。

センス・オブ・ワンダー

著者 レイチェル・カーソン
発行所 新潮社
徳之島町立亀徳小学校
竹ノ内 三千代

子どもたちの世界はいつも生き生きと新鮮で、驚きと感動に満ち溢れている。しかし、残念なことに、わたしたちの多くは大人になる前にそれらの感覚をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまう。

「もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない『センス・オブ・ワンダー』

神秘さや不思議さに目をみはる感性』を授けてほしいとのむでしょう。」

この言葉にはっとした。子どもたちは、一日の大半を学校で過ごす。子どもたちの関わりの中で、同じ感覚や気持ちで接していただろうか。

生まれつき備わっている子どものセンス・オブ・ワンダーを保ち続けるためには、喜び、感激、神秘等を子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が少なくとも一人はそばに必要が

あると、著者は述べている。

植木鉢にまいた一粒の種が芽を出し、成長していく植物の神秘について感動したり、子どもと一緒に空を見上げて、夕焼け空や月の美しさについて話題にしたことがあったらどうか。

子どもたちには、様々な情緒や豊かな感受性を育むことが大切である。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものに触れた時の感激等が呼び覚まされると、次は、その対象となるも

のについてもっとよく知りたと思うようになる。

子どもたちの周りは自然であふれている。その美しさや神秘、不思議さを感じる「センス・オブ・ワンダー」をいつまでも持ち続け、さらには子どもたちにもその感受性を育むために、いつもはあまり気にとめない自然、身近な出来事を再度見直し、子どもたちと一緒に驚き、感動する時間を見つけてみたいと思う。

自由投稿

「尊敬・信頼・期待」

鹿屋市立細山田中学校
大迫 俊浩

報道等で、保護者から学校への理不尽なクレームや、我が子への虐待が話題になるたびに、家庭における教育が心配になる。その一方で、飲酒運転、ワイセツなど不名誉な冠のついた「教員」の存在が指摘され糾弾されるたびに、保護者をはじめ関係者が、学校や教育行政に不安や不信、怒りを覚えるのはもったないことである。

もとより、初めから完璧な保護者や教員はいない。私自身を振り返ってみても、試行錯誤を重ね、反省し、自分の未熟さに気付かされながら周囲から教えられ、少しずつ成長できたように思う。その過程で、子どもを育てる楽しさや喜びも存分に味わえた。

子どもはもちろん、保護者や教員にも、成長するための時間を与え、見守ることが必要なのだと思う。そしてその時間は、子どもを取り巻く関係者が、愛情を基盤に信頼関



新任 教頭雑感

「みんなの力になれるように」

湧水町立上場小学校
山口 幸三

平成二十九年四月、私は教頭としての第一歩を踏み出した。新任教頭として赴任した上場小学校は、全校児童二十名の極小規模校である。

引っ越しの日、新しい住宅には、保護者や子ども二十数名が集まり、明るく出迎えてくれた。大きな不安を抱えて来た私の心が和んだひとときであった。

初出勤。新しい職場、新しい立場…に戸惑うばかりで、何もできずに時間が過ぎていったように感じる。その後も多くの公文の処理、報告物の提出に追われることもに、教頭としてどうすればよいのか、どのように動けばよいのかと自問自答する日々。そんな中、元氣と勇気を与えてくれるのは子どもたちである。登校後と下校前には子どもたちが入れ替わり立ち替わり職員室を訪れ「教頭先生、おはようございます。」「教頭先生、さようなら。」と声をかけてくれる。昼休みは校庭に出て、ブランコで遊んだり、一輪車の練習に励む子どもたちに付き合う時間も貴重なひとときである。

地域の行事に参加すれば、地域の方々が気軽に声をかけてくれる。道ばたで出会った高齢者の方からは「教頭先生、がんばってな。」と励ましの言葉も…。

教頭としてしっかり働けるようになるまでには時間がかかるであろうが、校長先生や先生方、子どもたちや保護者、地域の方々…いろいろな人に支えられる存在になりたいという思いでいっぱいである。

